

# 博物館だより

No. 8

企画展 「木曾川とくらし」

平成2年2月24日(土)～3月25日(日)



船頭平閘門付近(海部郡立田村)

## 展示室から

一宮市の北側を流れる木曾川は日本で5番目の規模を誇る河川で、日本3大平野の一つである濃尾平野を形成しました。その長さは227km、流域面積は5275km<sup>2</sup>で、木曾三川の中でも最も規模が大きいのです。この木曾川も以前は暴れ川で、流域の人々の暮らしを何度となく脅かしてきましたが、その反面人々にもたらした恵みもたくさんあったと言えます。そこで、今回の企画展は筏・水車に関する資料をはじめ漁具や魚の標本などを展示し、木曾川と人々の暮らしとのかかわりの一端に触れてみようと思うのです。

## 木曽川の水車★★★★★★

木曽川の水車には川から水を引き陸上で行なう陸水車(江南市宮田町)と、船に水車を取り付け川の流を直接利用した水車船(一宮市北方町)の2種類があります。江戸時代には綿の実を使った油の生産が盛んでしたが、明治時代の終わりには米・麦・粟などの雑穀をついたり、粉を挽いたりするのが中心になりました。水車は直径5m以上の大型のもので、7馬力から8馬力あったといえます。その水車も昭和初期には姿を消してしまいました。

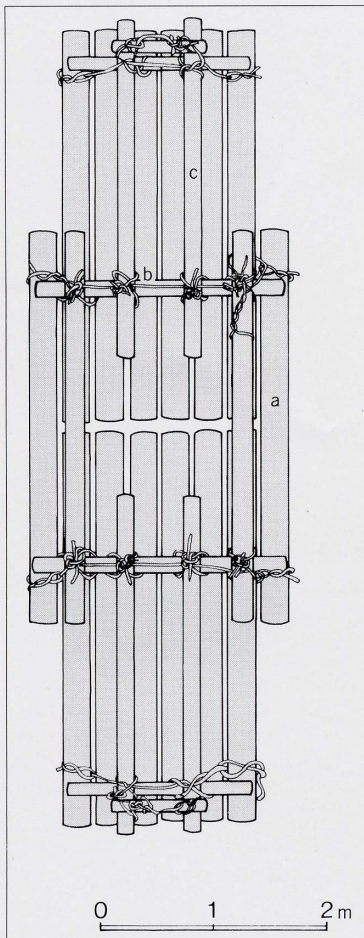


北方の水車船(明治時代)

## 木曽川の筏流送★★★★★★

木曽山の木材は中世以前より利用され、木曽氏、豊臣氏の支配を経て元和元年(1615)に信濃(現長野県)・美濃(現岐阜県南部)側・木曽川は尾張藩領に、飛騨側は天領になりました。そして、寛文年間(1661~73)には「木曽式筏木運材法」として伐木の技術も発展したのです。しかし、木曽川を利用した運材は、明治44年に中央線(宮ノ腰~木曽福島)が全通したこと、森林鉄道の開始、水力発電所の設置などにより衰退し、昭和18年の兼山ダムの完成とともに木曽川から完全に消えてしまいました。

✓筏の組み方は地方によって差があります。木曽川のものは約2間ほどに伐り出された木材を横に何本か並べ(幅は約3mになる)、さらにその2枚を縦に組み合わせます。両脇からツケギ(図a)と呼ばれる木で押さえ、上面からはナカゾエ(図b)・フンバリ(図c)をあて藤づるで固定します。(田中禎子)



筏の構造

(木納清八氏製作模型により作成)

### 催し物のご案内

- |        |      |                           |
|--------|------|---------------------------|
| ■講演会   | 日時   | 平成2年3月4日(日)午後1時30分        |
|        | テーマ  | 「尾張平野と天王祭り」               |
|        | 講師   | 名古屋民俗研究会代表 伊藤 良吉氏         |
| ■調査報告会 | 日時   | 平成2年3月11日(日)午後1時30分       |
|        | テーマ  | 「木曽川の渡し船」                 |
|        | 報告者  | 一宮市博物館事務局長 中山雅麗           |
| ■映画会   | 日時   | 平成2年3月18日(日)              |
|        |      | 午前11時・午後2時                |
|        | 上映映画 | 「木曽川-その源流をさぐる-」<br>「木の文化」 |
|        |      | ★展示説明 当館学芸員               |



木曽川の筏師

# 資料紹介

## 須恵器 壺

8世紀

一宮市浅井町小日比野字新田409 尾関 明氏寄贈

口径14.9cm、胴径28.0cm、高さ20.8cm

大正5年8月、浅井町小日比野宮裏の山王神社境内より出土し、尾関明氏の父である故尾関捨重氏が採集したもの。同時に出土したという、須恵器片(甗、高杯、杯など)、土師器片(甗の口縁部、高杯の杯部)とともに受贈した。



偏平な丸底の胴に短い口頸部をもった貯蔵用の壺。口縁部は内傾して立ち上がり受け口状を呈する。肩の部分に濃緑色の自然釉がかかっている。粘土紐巻き上げ成形で、外面は条線状叩き目の上からの篋削り調整、内面は口縁部のみナデ調整を施している。鉄分の多い土を用いかつ酸化焰に近い焼成のためかやや赤く発色しているが、非常に良く焼き締まっている。

出土した状況は明らかでないが、伴出した土器などから7世紀後半から8世紀にかけて同地に住居跡が存在したことが推定されよう。(土本典生)

## 一宮産物会所為替札

16.0×6.8×0.3cm

## 一宮産会所為替締方印鑑

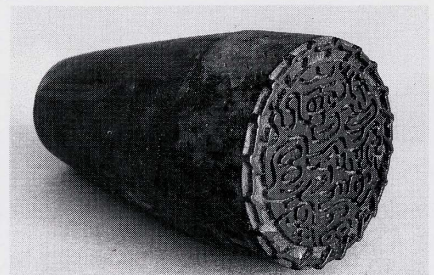
10.5×φ6.0cm 明治初期

一宮市桜1-9 豊島 吉蔵氏寄贈

本資料は、明治初期に大坂と一宮の商品取引所で使用されていた木製為替札とそこに押された印鑑である。発行された午五月は、今から丁度120年前の明治3年(1870)庚午のとし。豊島吉蔵氏の曾祖父源蔵氏は反物・糸を手広く高い、同時に一宮産物会所の役員をしていた関係で、同家に伝来したものである。

産物会所とは、「国産会所」とも称され、江戸時代、幕府や諸藩が殖産興業政策・国産専売のために設けた機関。尾張藩では、最初天保13年(1842)に設立され、江戸時代以降大きく発展した白木綿・棧留縞・結城縞などの商品統制をし、生産者や農商層による自由取引を禁じたが、かえって経済界の混乱を招き、嘉永6年(1853)に一度廃止されている。その後、慶応2年(1866)に復活し、明治2年(1869)には東京・横浜・大坂にも設置、続いて領内の北方・宮田・一宮・馬寄・竹々鼻・津島などに枝会所が設けられ、会所役員には、それぞれの地方の有力豪農商層が任命されている。しかし、維新の混乱と藩解体の過程ではたしてどの程度その目的を達することが出来たのか詳らかでない。一宮産物会所は結局1年程で明治3年に解散されている。(毛受英彦)

参考文献 『新編一宮市史資料編9・本文編上』



為替札(上)  
印鑑(下)

博物館日誌(抄)(1.11.1~2.1.31)

- 1.11.3 講演会「道仏二教諸尊図について」  
講師 文化庁美術工芸課長  
渡邊明義氏
- 1.11.12 第13回織維講座
- 1.11.19 島文楽公演  
「壺坂靈験記」  
「傾城阿波鳴門」  
解説 日置弥三郎氏
- 1.11.23 特別展「一宮の名宝(Ⅲ)」閉会
- 1.11.26 第14回織維講座
- 1.12.23 企画展「尾張の戦国武将一兼松正吉一」  
~2.1.28
- 2.1.7 講演会「ある在地武士の生涯  
一兼松文書について一」  
講師 名古屋大学教授  
三鬼清一郎氏
- 2.1.14 第15回織維講座
- 2.1.21 映画会「鉄砲の伝来」  
「安土桃山時代の社会と文化」  
展示説明 当館学芸員
- 2.1.28 第16回織維講座

## これからの博物館

特別展「地機で織る-越後縮-」 4/28-5/27(予定)



生麻地花樹文字模様染織帷子  
(山田屋呉服店蔵)

地機は、「五体を使って織る」といわれ、その風合いには独得のものがあるが、明治中期には殆ど消滅した。この特別展では、国の重要無形文化財に総合指定されている「越後上布・小千谷縮」を中心に、その手業の美を探るものとする。

【ご来館ありがとうございました】

(1.11~1.12)

弥富町文化財保護審議会委員ほか・尾西市文化財めぐり・四日市市・徳山市議会・函館市議会・愛知県議会総務企画委員会・新日本建築家協会・二見町教育長ほか・武豊町文化財保護審議会

【民俗展示室の模様替え】2.1.5~



師走になると餅搗きやしめ縄作りなど慌ただしい日が続きます。しかし、忘れてはならないのが1年間共に汗を流してきた農具への感謝です。尾張地方では、農具を玄関先などに立てかけて鏡餅、切り餅をお供えます。今回は、正月にまつわる道具を展示しました。

### ■博物館からのお知らせ・お願い

博物館では来年に、祭と年中行事に関する企画展を計画しています。皆さんの地元で行われている祭などに関する情報を是非お知らせ下さい。お電話・お手紙お待ちしております。

〈→学芸係田中まで〉

## 利 用 案 内

### 開館時間

午前9:30~午後5:00  
(入館は午後4:30まで)

### 常設観覧料

区分	個人	20人以上の団体
一般	200円	160円
高・大	100円	80円
小・中	50円	40円

(1人1回)

### 休館日

- 毎週月曜日  
(ただし、休日にあたる場合は翌日を休館)
- 休日の翌日  
(ただし、日曜日又は休日の場合は開館)
- 年末・年始  
(12月28日→1月4日)

名鉄電車「妙興寺駅」下車徒歩5分

## 一宮市博物館だより 第8号

平成2年2月15日

編集・発行 一宮市博物館

〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地

TEL0586-46-3215

FAX0586-46-3216